

5-1 園芸生産の戦略的拡大を実現する生産技術の開発

農業試験場 野菜研究室 花き研究室

成果のポイント

○にら「ゆめみどり」の早期捨て刈り連続収穫栽培において、育苗期間を90日、定植時の植溝を15cmと深くすることで、品質（AL率：葉幅8mm以上の茎数の割合）が約10%向上し、調製作業時間を約10%削減が可能。

○あじさい新品種「パラソルロマン」の母の日出荷向けの栽培技術を確立。

1 背景・ねらい

本県園芸部門の産出額は956億円（全国14位（平成26年））で、農業生産額の38%を占め、かつての水稻中心の農業構造から園芸部門が大きく伸びてきた。しかし、近年、園芸生産の伸びは鈍化しており、本県農業の潜在的な生産力や大消費地である首都圏に位置するという地理的優位性を生かし切れていない。

首都圏の農産物需要に応じ園芸生産を更に拡大していくためには、地域の特性を生かし、いちご、トマトに次ぐ園芸産地を育成・強化していく必要がある。

2 成果の概要

（1）にら新品種「ゆめみどり」の高生産技術の確立

- ・ 通常のにらは12月頃から捨て刈りを行うが、「ゆめみどり」をもっと早い10月頃から早期捨て刈り連続収穫栽培を行った。育苗期間を90日間にして大苗とすることで本圃での短い株養成期間を補い、定植時の植溝を15cmと深くして分げつを抑制することで、AL率（葉幅8mm以上の茎数の割合）が約10%向上し、調製作業にかかる時間は10%削減できることを明らかにした（表、写真1）。

（2）あじさい新品種「パラソルロマン」の高品質安定生産技術の確立

- ・ 苗の摘心（側枝を増やすことを目的に行う剪定）時期は、8月20日～30日頃に行うと充実した越冬芽が作られる。
- ・ 越冬芽の休眠を打破するための5℃以下の低温期間は35日程度が適当で、開花時の草姿バランスが優れる（写真2）。
- ・ 花色は、栽培用土にリン酸肥料を4.4g/鉢以上与えると赤ピンク色の発色が優れる（写真3）。

3 成果の活用・留意点

（1）にら新品種「ゆめみどり」の高生産技術の確立

- ・ にらの栽培においては、調製作業を省力化することが重要であるため、本成果を活用し、生産拡大につなげていただきたい。

(2) あじさい新品種「パラソルロマン」の高品質安定生産技術の確立

- ・ 低温期間の違いと開花形質の関係は低温遭遇前の花芽の状態により異なる可能性がある。

4 具体的データ

表 1から「ゆめみどり」の育苗、定植方法の改善効果

処理区	収量kg/a	調製AL率	調製時間	
			収穫kgあたり	aあたり (hr)
大苗、深溝区	1015	86	20分59秒	57時間
慣行区	995	76	23分27秒	63時間
対比	102%	+10p	89%	90%

注 1) 調製時間は、①選別(規格外茎の除去)②簡易な袴及びごみ取り③計量(1束約115g)までを計測した。
2) 調製後重量は束数(端数含む)×100gとした。
3) 時間表記は、分：秒



写真1 葉幅の広い「ゆめみどり」



写真2 低温期間の違いによる開花株の様子
(4月28日撮影 左から25日、30日、35日、40日)



写真3 リン酸肥料施用量の違いと装飾花
(左から無処理、リン酸成分量 2.2g、4.4g、6.6g)